

博士（文学）学位論文

Studies in the Language of  
the Fourteenth-Century English Mystics  
(邦題 14世紀イギリス神秘主義者の言語研究)

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D095246

氏名：片見 彰夫

本論文は、英語復興の時代とされる 14 世紀に活動したキリスト教神秘主義者の散文における言語について考察したものである。宗教を内容とする書は、教えを伝えることを目的とするからには説得力をもたねばならない。読む者、聴く者を一つの方向に導こうとする意図が働く理由がここにある。そのためには感情に訴えかけ、メッセージを明確に伝えることが必要とされる。言語という手段によって、自己が体験した幻視を、いかに俗人としての第三者に伝え、その思考や行動へ変化を促そうとしたかについては、神秘主義者の文体を探る上で重要な視点であり、本研究の土台をなすものである。しかし神秘主義者について思想、フェミニズムといった観点から考察された先行文献は少なくないが、文法や文体といった言語面においては十分とはいえない。また個々の作品について論述されたものが大部分であり、相互に影響を及ぼし合ったジャンルとして比較研究されるべき余地が多分に残されたままになっている。個々の散文を別々に研究する前に、相互間の文体を比較することによって明らかになる点も多い。本論文では言語と文体について、文法、語用論、そして修辭法の特徴を中心にして考察することによって、英語散文史上重要とされる神秘主義散文の言語における新たな知見を得ることを主眼とする。

序論では、神秘主義者の言語に関する先行研究を紹介し、本論文に関連性のある視点を要約している。ノルマン人による征服以前の豊かな国民文学を受け継いでいる稀少価値ある散文を書いた者として Richard Rolle の名を挙げ、英語散文の伝統性を主張した Allen や Chambers の論説等に注目しながら、イギリス文学史における神秘主義散文の意義を指摘した。Richard Rolle から影響を受けたと思われる Walter Hilton, Julian of Norwich, Margery Kempe も、神秘主義散文として取り上げられる。Wilson の論文は文体面からその最初の契機を示した研究として意義がある。さらに Gordon は、英語散文の連続性とは話し言葉による連続性であると考えた。庶民の使用する話し言葉が、英語散文の文体の立ち返るべき基本の底流をなしてきたとの指摘は、英語散文の継承を考えるうえで説得力を持つものである。Stone は本論文の一つのテーマとなっているワードペアや繰り返し表現について Julian of Norwich と Margery Kempe による豊富な例を示している。各神秘主義者の思想的背景については Riehle, Glasscoe, Edwards に述べられている。神秘主義者の散文についての歴史的背景については Dyas, Edden and Ellis に詳しい。これらの先行研究では言及されていない文脈への考慮や、語用論の知見を加えて、14 世紀神秘主義者の散文を言語面から考察していくことが本論文の目的である。

第一章では、主な対象として論じる 4 人の神秘主義者の思想と、作品の背景について説明している。Butler は、「キリスト教神秘主義」とは神を求める強い意志と、恩恵によって得られる観想において、神を靈的に認識することをその内容とする。残された写本の多さや、後に成された引用の頻度から、Rolle や Hilton は、当時から広く読まれ、名の知られた神秘主義者であったことが分かる。彼らの影響は、後に続く Julian や Kempe にも及んでいる。Julian の文中には Hilton の影響を想起させる部分が見受けられるし、Kempe では、自身が Hilton や Rolle の作品を凌ぐ、神による高貴な働きを身をもって感じたことに触れている。Julian の庵を自ら訪ねたことなどからも、Hilton らの著した観想文学や神秘主義文学との接触が Kempe の靈的成長を促した、ということが言えるであろう。彼らはいずれもイングランド北東部を主な活動地としており、テキストは東中部方言で書かれている。Rolle はイギリスに新しい精神生活の流れを注ぎ入れた者で、他の神秘家は多かれ少なかれ彼の影響を受けている。読者を限定したラテン語での著作に対して、英語で書かれたものは一般信徒を対象としていた。Hilton は、靈的な梯子のイメージを表題に用いている。これは天使たちが昇り降りしているのをヤコブが夢に見た旧約聖書「創世記」の話に由来している。彼は 4 人の神秘家の中で、世俗の現実生活に最も接触があり、多くの人たちの精神生活に関わりをもったとされる。Julian は『神の愛の啓示』となる 16 回の啓示を授かっている。間を置かず書かれたショート・テキストと、体験の意味を約 20 年の歳月をかけて、熟考した記録であるロング・テキストが存在する。Kempe からは、「キリストの花嫁」としての靈的生活が綴られたイギリス最古の自伝としても知られている『マージェリー・ケンプの書』を対象とすることを説明している。

第二章では、Julian と Kempe から説得という観点から興味深い文法項目を選び、Chaucer 等の中英語作品や、現代英語にも言及することで、英語史の流れを視座に置きながら比較検討した。現在分詞と動名詞の生起状況と、受動態構文について、文脈を考慮しながら調査論証している。14 世紀後半では、現在分詞の形式として、“-ing”、“-yng”が一般的であったが、Julian では 39 の動詞において、“-and”が共存している。この理由として動名詞語尾、分詞が修飾する語との関連性を指摘した。さらに、Julian は分詞構文を主に文中、文尾で使用していることから、内容の進展、情報の付加、説明に活用していた事が分かる。「ラテン語を理解する教養がない」と自ら遜りながらも、実際はラテン語に由来する文体を巧みに用いていることから、慎み深いとされる彼女の人物が文体からも裏付けられる知見が示されている。受動態の用法にも、Julian と Kempe の思想と人物が反映されており興味深い。分析的、客観的態度を保ち、受動態を好む Julian に対して、自己の意思を主観的に

打ち出したい Kempe は能動態での描写が多くなっていることを実例に基づき主張している。

第三章では、歴史語用論の観点から言語発話行為、*metadiscourse* と、ポライトネス理論に基づき分析している。歴史語用論は 1995 年の Jucker に端を発してから日の浅い分野であることから、本章を通じて神秘主義者の言語研究に新たな視座を提示することを心掛けた。通時的観点も重要であることから、後期中英語の宗教散文、そして近代英語から欽定訳聖書中の 4 編の福音書や Shakespeare 喜劇も考察対象に含めている。神秘主義者は自己の得た幻視や体験を伝えることにより、相手の心象に変化を生じさせることで、行動の変容を導こうとすることが多い。つまりその陳述には、指示行為という発話行為の存在が想定できる。神秘主義者達は、発話行為動詞を呼びかけ、強意表現と輻輳させることで効果を高めていることを検証している。また神秘主義者を中心とした中英語期は権威ある書、言説からの引用を多めに用いる傾向があるが、近代英語になると書き手自身の意思が明示される例が多くなることを数量化により示している。神への問いかけにはネガティブ・ポライトネスを用いる一方で、読み手へは説得の効果を考慮して、ネガティブ・ポライトネスと併用していることが分かった。彼らによる口語的な文体を反映しているコミュニケーション形式は丁寧さの理論からも研究の発展性があることを論証している。

第四章では、本散文群の文体の特徴を考える時、とりわけ大きな意味を持つ、2 語を *and* で繋げたワードペア、反復と変奏、メタファーについて検討し、宗教散文としての極めて特徴的な文体は基底においてこうした修辞によって支えられていることを考察している。まずワードペアの頻度、語源、意味について分析する。ワードペアや反復表現は繰り返される語（句）に読者の注意を集中させることにより、その要素を前景化させることが基本機能であり、伝達内容の明確化と徹底を図り、簡潔な言葉で豊富な内容を伝えることも可能な技巧である。加えて、無標の言葉では表現しきれない深い考えや、峻烈な感情を伝えることにも寄与する。これら説得に係る表現の語彙として、宗教散文では英語本来語を中心として用い、民衆には親しみの薄いと思われる外来語の使用は控えられた。その一方、Shakespeare では、登場人物の性格の反映や、喜劇としての特性を生かすためにロマンス系の語彙を中心に目新しい外来語を取り入れ、時には意図的な誤用を含めるといった言葉遊びを随所に用いながら、聴衆を楽しませることが意図されていることが分かった。繰り返し表現やワードペアの文体効果は、古英語期から存在し、中英語を経て近代英語へと継承されているものである。続いて比喻を扱う。先行研究は豊富であるが、さらなる考察の余地は多く残されている。例えば、安井は、宗教的体験を語る際、人は文字通りの意味の言葉の世界から、メタファーの世界へ必然的に入ってゆかねばならないと主張するが、立証となる実例は示していない。メタファーによって、その言語を使う人々の思考や行為が左右されているということが Lakoff and Johnson の結論となっている。しかし対象が現代英語の日常語のみに限られているという点から、通時的な視点においては、補う可能性が残されていると考えている。神秘主義者は聖書中のメタファーも直接用いてはいるが、独創的な用例も多々見られる点をメタファーの 3 つのタイプ、*ontological*, *orientational*, *structural* の分類に沿って明らかにした。

第五章では、Julian のショート・テキストと 20 年間の再考後、ほぼ 6 倍の長さとなったロング・テキスト間の、綴りのヴァリエーションや表現形式を比較する。最初に Julian 自身の言葉に最も近いと見なされる Sloane 写本 2499 番に基づいた校訂本の綴りのヴァリエーションを指摘する。またロング・テキスト第 51 章では、ショート・テキストにはなかった反復・変奏表現を加える等の大幅な加筆を行っている。このような 2 つの版の間で拡大、省略されている表現形式の違いを比較し、考察している。しかし、形而下の言葉のみを介して、精神世界に関与する神秘主義体験を伝えることには、困難が伴う。ましてや、それに耳を傾ける人々の多くは、必ずしも神秘主義への意識が備わったとは言えない平信徒や俗人も多かったのである。Julian は、五感を通じた感覚表現を用いて、自己が得た神秘主義体験を伝達している。生活経験に基づいた感覚表現は認識を共有させる効果が高いことから、彼女は受け手の想像力を喚起する上で、感覚表現の有効性を認識していたと考えられる。Julian の姿勢は、明朗快活でありながらも、一貫して控えめで知的であり、決して声高に感情を露わにしたりはしない。Julian は、感覚表現を、幻視における描写や、悪魔の誘惑、それを退ける神の声、十字架上のキリストの血と痛苦の描出に用いている。

結論として、以上の検証と考察から、神秘主義散文群がミクロのレベルでは文法、語用論、修辞法の様々な表現を駆使して、説得を行うための表現を構築しており、マクロのレベルにおいては、英語復興の息吹が色濃く反映されていることから、キリスト教散文の観点からだけでなく、英語英文学史においても極めて重要であり注目されるべきであると論じている。